

Working Paper Series in Attached School Database Project

**Changes in Life under COVID-2019 Pandemic
among Junior High and High School Students:
A Panel Survey of Secondary School
in Tokyo Metropolitan Area**

Yuki Ueno, Ichiro Hidaka, and Hideto Fukudome
The University of Tokyo

March, 2022

No. 8

Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research
Graduate School of Education, The University of Tokyo
東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター

コロナ禍における中高生の生活の変化:

—都内中等教育学校を対象としたパネル調査から見えてくるもの—

上野雄己・日高一郎・福留東土（東京大学）

Changes in Life under COVID-2019 Pandemic among Junior High and High School Students:

A Panel Survey of Secondary School in Tokyo Metropolitan Area

Yuki Ueno, Ichiro Hidaka, and Hideto Fukudome

The University of Tokyo

Authors' Note

Yuki Ueno and Ichiro Hidaka are project assistant professors at the Center for Advanced School Education and Evidence-based Research (CASEER), Graduate School of Education, the University of Tokyo.

Hideto Fukudome is a professor at the Center for Advanced School Education and Evidence-based Research (CASEER), Graduate School of Education, the University of Tokyo.

Abstract

This study aimed to investigate changes in the lives, behaviors, attitudes, and relationships of junior and senior high school students associated with the spread of coronavirus disease 2019 (COVID-19) in secondary school in Tokyo metropolitan area, Japan. The survey was conducted with secondary schools attached to the faculty of education, University of Tokyo, in fiscal year 2020. The analyzed data included 671 students (347 junior high school students, 324 high school students) who completed an online questionnaire. Results showed a significant difference in response tendency between junior high school and high school students for certain items regarding changes in living environment; however, effect sizes were all small. Since the onset of the COVID-19 pandemic, lifestyle adjustments have been necessary, and a larger percentage of both junior high school and high school students responded that the amount of time spent studying online (60% or more) and time spent at home (80% or more) had increased, compared to before the pandemic. Examples of changes in life resulting from the COVID-19 situation/environment were seen in the more than 50% of respondents who indicated that time spent with their families, using computers and smartphones, and using social networking services had increased. On the other hand, more than 50% of respondents indicated that time spent with friends, exercising, and playing outside had decreased. These results suggest that many students' lives, behaviors, attitudes, and relationships have changed as a result of the spread of COVID-19.

Keywords : coronavirus disease 2019, lifestyle, school life, junior high and high school students, secondary school

コロナ禍における中高生の生活の変化

—都内中等教育学校を対象としたパネル調査から見えてくるもの—

1 問題と目的

新型コロナウイルス感染症（coronavirus disease 2019；COVID-19）の蔓延は世界規模での拡大を見せ、2022年2月現在でも、未だ生活の様々な場面に大きな影響をもたらしている。感染者増加に伴い、日本においても緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が繰り返し発令され、感染予防対策のために、新しい生活様式が導入されている（厚生労働省、2020）。新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活様式の変化がもたらす社会への影響は人々の生活や行動、意識など様々な領域や場面の大きな変化に繋がっている（経済産業省、2020；内閣府、2020；総務省、2020）。こうしたコロナ禍の影響は働く世代に限ったことではなく、教育を受ける若い世代の人たちにも多大な影響が及んでいる。

例えば、その代表的なものとして、オンライン授業の導入が挙げられる。緊急事態宣言の発令に伴い、全国的に臨時休校の措置がとられ、対面授業から遠隔授業への転換が余儀なくされている（文部科学省、2020、2021a、2021b）。こうしたオンライン授業の導入や臨時休校、外出自粛は子どもたちの生活様式に大きな変化をもたらしている（藤川、2021；村田、2021；大枝、2020）。具体的に、小中学生の子どもを持つ保護者1,000名（父親・母親各500名）を対象にした、新型コロナウイルス感染症の影響下における生活の変化を調査した報告がある（近視予防フォーラム、2020）。この調査によれば、SNSをする時間や睡眠時間は約6割前後が変わらないと回答しているものの、自宅で過ごす時間やPCやスマートフォンをみる時間が7割以上増加しており、屋外で遊ぶ時間は6割以上減少していること、さらには5

割以上の小中学生が友人関係などの人間関係の構築を危惧していることが報告されている。このような変化は小中学生だけでなく、未就園児や高校生、大学生においても生活習慣や学習、社会との関わりはコロナ禍以前と比較して大きく変化していることが明らかとなっている（個別教育舎、2021；国立生育医療研究センター、2021；LINEリサーチ、2020；文部科学省、2021c）。一方で、大学生を対象とした研究知見は多いが、中高生における個人の生活の変化について学校単位で調査された報告は未だ少なく、引き続き研究知見の蓄積が必要だと思われる。

こうした中、東京大学教育学部附属中等教育学校（以下、東大附属）の教育効果検証を目的に、2016年度より東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センターと東大附属が連携した調査プロジェクト（以下、東大附属パネル調査）がある（山本・日高、2016）。この東大附属パネル調査では、継続的に1年生（中学1年生相当）から6年生（高校3年生相当）を対象に調査された在校生パネル調査（天井・上野・日高・福留、印刷中；本田、2019；川本、2020；川本・日高・梅原、2019；川本・日高・荒井、2020）と、2017年度に行われた卒業生調査（天井、2020；荒木、2020；喜入、2019；上野・日高・福留、2021、印刷中）、2021年度より開始された東大附属卒業後継続調査（横原・上野・日高・福留、2022）がある。これまでに当該パネル調査のデータを使用し、東大附属の教育効果検証が多角的に行われている。

東大附属もまたコロナ禍において臨時休校、オンライン授業、分散登校の導入を始め、様々な対応がされてきた（東京大学教育学部附属中等教育学校

PTA 広報委員会, 2021)。感染拡大による影響があった 2020 年度では、上述のパネル調査に新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活の変化に関する質問項目が導入され、全数調査が実施されている。以上の状況を鑑みて、本研究では都内中等教育学校（中高一貫教育）である東大附属の中高生を対象とし、新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活の変化を定量的に検討することを目的とする。なお、東大附属では 1・2 年生（基礎期）、3・4 年生（充実期）、5・6 年生（発展期）の 2—2—2 制によるカリキュラムの構成がされているが、前期課程（1—3 年生）は中学校、後期課程（4—6 年生）は高等学校とほぼ同等の授業が行われている（東京大学教育学部附属中等教育学校, 2020）。本研究では一般的な区分である中学 1—3 年生相当である前期課程と、高校 1—3 年生相当である後期課程に分類し、中高生の回答傾向の違いを明らかにする。

2 方法

2.1 分析データ

本研究では附属学校データベースプロジェクト (<https://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/db/>) で調査された在校生パネル調査を二次分析のデータとして使用した。調査は年度末に実施され、セキュリティや個人情報保護対策を十分に施した調査ページ上で行い、参加者は調査ページにログインするための固有の ID を用いて、学校内のコンピューター端末から回答を行った。本研究では、新型コロナウイルス感染症拡大による生活の変化を問う項目に関する調査が行われた 2020 年度の在校生パネル調査のデータを分析対象とした。

なお、本研究は東京大学大学院教育学研究科附属学校データベース管理運営委員会より、データの使用許可を得た上で実施された。加えて、生徒の個人情報保護のため、個人を特定できる情報は削除なら

びに匿名化してデータの提供を受けている。

2.2 分析対象者

分析対象者は 2020 年度の在校生パネル調査に調査協力し、当該項目に回答された 1 年生から 6 年生 671 名（男性 323 名、女性 330 名、どちらでもない 18 名）であった。なお、分析時には前期課程（中学 1—3 年生相当）347 名（男性 171 名、女性 165 名、どちらでもない 11 名）、後期課程（高校 1—3 年生相当）324 名（男性 152 名、女性 165 名、どちらでもない 7 名）に分類して使用した。なお、男女比はほぼ等しいが、2018 年度に調査項目の改訂が行われ、「どちらでもない」が選択できるようになっている。

2.3 分析対象項目

本研究では新型コロナウイルス感染症拡大に伴う環境の変化が生徒の生活や行動、意識、人間関係にどのような影響をもたらしているのか測定するために、表 1 に示す 16 項目を使用した。

近視予防フォーラム (2020) にて調査された項目を参考にし、コロナ禍における生活の変化として、学習面や心身面、社会面などの 16 項目を準備項目として設定した。なお、項目の作成には、当該パネル調査のワーキンググループに所属する教育学などを専門とする研究者と当該の中等教育学校の教員を中心とした約 20 名の専門家にて行われた。質問項目に対する教示は「新型コロナウイルス感染拡大によってどのような変化がありましたか。感染拡大前と比較して、1) ~16) のそれぞれについて、現在のあなたの状態にあてはまる数字を選択して下さい。」とされた。回答は「とても減った (-2 点)」「少し減った (-1 点)」「変わらない (0 点)」「少し増えた (1 点)」「とても増えた (2 点)」の 5 件法で求めた。なお、本研究では近視予防フォーラム (2020)

表1 本研究で使用する質問項目

番号	項目内容
Q1	家の中で過ごす時間
Q2	家族との関わり
Q3	友だちとの関わり
Q4	先生との関わり
Q5	パソコンやスマートフォンの利用時間
Q6	テレビやネット動画をみる時間
Q7	ゲームをする時間
Q8	SNSをする時間
Q9	メールやLINEなどによるコミュニケーション
Q10	睡眠時間
Q11	運動する時間
Q12	外で遊ぶ時間
Q13	オンライン学習の時間
Q14	学校以外で勉強する時間
Q15	身体的な疲れ
Q16	精神的な疲れ

や国立成育医療研究センター（2021）の調査結果を参考に、「とても減った」または「少し減った」と回答した者を「減った」、「とても増えた」または「少し増えた」と回答した者を「増えた」、「変わらない」の3分類にし、分析に使用した。

2.4 分析方法

中学校に相当する前期課程と高等学校に相当する後期課程の新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活の変化に対する回答傾向の違いを検討するために、カイ二乗検定を行った。 χ^2 値が有意である場合には下位検定として残差分析 (Haberman, 1974) を実施し、多重比較 (有意水準の調整) には Holm 法を用いた。本研究では期待値が 5 未満のセルもしくはそうしたセルが全体の 20% 以上ではなかったため、カイ二乗検定を適用した (Cochran, 1954 ; 水

本, 2010)。統計解析には R version 4.1.0 (R Development Core Team, 2021) を用い、有意水準を 5% とした。なお、vcd (Meyer & Zeileis, 2021) パッケージ使用時には 4.1.2 の R の下、分析が行われている。

3 結果と考察

学年 (前期課程・後期課程) と新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活の変化 (減った・変わらない・増えた) 16 項目のクロス表 (2×3) を作成しカイ二乗検定を行った (表 2-5)。分析の結果、「先生との関わり」「パソコンやスマートフォンの利用時間」「テレビやネット動画を見る時間」「ゲームをする時間」「学校以外で勉強する時間」の項目において有意な χ^2 値が示され、小程度以上の効果量 (Cohen, 1988) が確認された。

これらの項目に対して残差分析ならびに Holm 法による有意水準を補正した結果、「先生との関わり」において「変わらない」と回答した者の割合が前期課程で多かった ($p_{\text{adj}}=0.022$)。「テレビやネット動画をみる時間」では「減った」「変わらない」と回答した者の割合は後期課程で多く ($p_{\text{adj}}=0.023$)、「増えた」と回答した者の割合は前期課程で多かった ($p_{\text{adj}}=0.001$)。「ゲームをする時間」では「減った」と回答した者の割合は後期課程で多く ($p_{\text{adj}}<0.001$)、「増えた」と回答した者の割合は前期課程で多かった ($p_{\text{adj}}<0.001$)。そして、「学校以外で勉強する時間」では「変わらない」と回答した者の割合は前期課程で多く ($p_{\text{adj}}=0.003$)、「増えた」と回答した者の割合は後期課程で多かった ($p_{\text{adj}}<0.001$)。なお、「パソコンやスマートフォンの利用時間」において有意な χ^2 値が示されたが、多重比較では前期課程と後期課程の間で有意な差が検出されなかった。

こうした違いが見られた理由の一つとして、そもそも中等教育学校であるゆえ、前期課程よりも後期課程の方が進学を意識し、勉強時間の増加に伴い、

表2 新型コロナウイルス感染症拡大による生活の変化(1)

項目		前期 課程	後期 課程	χ^2 ($df = 2$)	p	Cramer's V
《Q22_1：家の中で過ごす時間》						
減った	度数	6	9	1.08	0.583	0.04
	比率(%)	1.7	2.8			
変わらない	度数	37	38			
	比率(%)	10.7	11.7			
増えた	度数	304	277			
	比率(%)	87.6	85.5			
《Q22_2：家族との関わり》						
減った	度数	20	15	1.19	0.551	0.04
	比率(%)	5.8	4.6			
変わらない	度数	110	94			
	比率(%)	31.7	29.0			
増えた	度数	217	215			
	比率(%)	62.5	66.4			
《Q22_3：友だちとの関わり》						
減った	度数	180	180	3.62	0.164	0.07
	比率(%)	51.9	55.6			
変わらない	度数	101	100			
	比率(%)	29.1	30.9			
増えた	度数	66	44			
	比率(%)	19.0	13.6			
《Q22_4：先生との関わり》						
減った	度数	157	171	9.30	0.010	0.12
	比率(%)	45.2	52.8			
変わらない	度数	△166	▼119			
	比率(%)	47.8	36.7			
増えた	度数	24	34			
	比率(%)	6.9	10.5			

注1) 前期課程 = 中学1—3年生相当, 後期課程 = 高校1—3年生相当, 減った = 「とても減った」または「少し減った」, 増えた = 「とても増えた」または「少し増えた」

注2) 比率は小数点2桁目を四捨五入した値となり, 合計値が100にならない場合がある。

注3) 残差分析ならびにHolm法によって調整した結果, △は有意 ($p < 0.05$) に高い比率, ▼は有意 ($p < 0.05$) に低い比率を示す。

表3 新型コロナウイルス感染症拡大による生活の変化(2)

項目		前期 課程	後期 課程	χ^2 ($df = 2$)	p	Cramer's V
《Q22_5：パソコンやスマートフォンの利用時間》						
減った	度数	7	9	6.67	0.036	0.10
	比率(%)	2.0	2.8			
変わらない	度数	48	68			
	比率(%)	13.8	21.0			
増えた	度数	292	247			
	比率(%)	84.2	76.2			
《Q22_6：テレビやネット動画をみる時間》						
減った	度数	▼5	△17	16.64 < 0.001		0.16
	比率(%)	1.4	5.3			
変わらない	度数	▼61	△85			
	比率(%)	17.6	26.2			
増えた	度数	△281	▼222			
	比率(%)	81.0	68.5			
《Q22_7：ゲームをする時間》						
減った	度数	17	30	28.19 < 0.001		0.20
	比率(%)	4.9	9.3			
変わらない	度数	▼115	△159			
	比率(%)	33.1	49.1			
増えた	度数	△215	▼135			
	比率(%)	62.0	41.7			
《Q22_8：SNSをする時間》						
減った	度数	14	24	3.75	0.153	0.08
	比率(%)	4.0	7.4			
変わらない	度数	141	122			
	比率(%)	40.6	37.7			
増えた	度数	192	178			
	比率(%)	55.3	54.9			

注) 注釈は表2と同じである。

表4 新型コロナウイルス感染症拡大による生活の変化(3)

項目		前期 課程	後期 課程	χ^2 ($df = 2$)	p	Cramer's V
《 Q22_9：メールやLINEなどによるコミュニケーション》						
減った	度数	25	35	4.56	0.102	0.08
	比率(%)	7.2	10.8			
変わらない	度数	126	129			
	比率(%)	36.3	39.8			
増えた	度数	196	160			
	比率(%)	56.5	49.4			
《 Q22_10：睡眠時間》						
減った	度数	84	67	5.67	0.059	0.09
	比率(%)	24.2	20.7			
変わらない	度数	140	113			
	比率(%)	40.4	34.9			
増えた	度数	123	144			
	比率(%)	35.5	44.4			
《 Q22_11：運動する時間》						
減った	度数	218	216	1.08	0.582	0.04
	比率(%)	62.8	66.7			
変わらない	度数	74	62			
	比率(%)	21.3	19.1			
増えた	度数	55	46			
	比率(%)	15.9	14.2			
《 Q22_12：外で遊ぶ時間》						
減った	度数	207	218	4.24	0.120	0.08
	比率(%)	59.7	67.3			
変わらない	度数	104	80			
	比率(%)	30.0	24.7			
増えた	度数	36	26			
	比率(%)	10.4	8.0			

注) 注釈は表2と同じである。

表5 新型コロナウイルス感染症拡大による生活の変化(4)

項目		前期 課程	後期 課程	χ^2 ($df = 2$)	p	Cramer's V
《Q22_13：オンライン学習の時間》						
減った	度数	13	14	0.72	0.697	0.03
	比率(%)	3.8	4.3			
変わらない	度数	94	79			
	比率(%)	27.1	24.4			
増えた	度数	240	231			
	比率(%)	69.2	71.3			
《Q22_14：学校以外で勉強する時間》						
減った	度数	41	27	14.41 < 0.001		0.15
	比率(%)	11.8	8.3			
変わらない	度数	△149	▼103			
	比率(%)	42.9	31.8			
増えた	度数	▼157	△194			
	比率(%)	45.2	59.9			
《Q22_15：身体的な疲れ》						
減った	度数	76	75	0.34	0.844	0.02
	比率(%)	21.9	23.2			
変わらない	度数	164	146			
	比率(%)	47.3	45.1			
増えた	度数	107	103			
	比率(%)	30.8	31.8			
《Q22_16：精神的な疲れ》						
減った	度数	50	45	1.66	0.436	0.05
	比率(%)	14.4	13.9			
変わらない	度数	137	114			
	比率(%)	39.5	35.2			
増えた	度数	160	165			
	比率(%)	46.1	50.9			

注) 注釈は表2と同じである。

余暇活動にあてる時間が少なくなることが予想される。また外出自粛に伴い、ゲームや動画視聴などの屋内遊びが増えた可能性がある。これらの点について、他調査でも類似した報告がなされており（近視予防フォーラム，2020；個別教育舎，2021；国立生育医療研究センター，2021；LINEリサーチ，2020），家で過ごす時間が増加したことで、行動や意識の変化が前期課程と後期課程で差が顕著に見られるようになったのかもしれない。しかし、上述の一部の項目にて前期課程と後期課程で回答傾向に違いが見られたものの、効果量は全て小程度であり大きな差があるとは言えず、慎重な解釈が必要である。

先述のように一部の項目には各課程で差が見られたが、概ね、中高生に相当する生徒の多くは同様の生活、行動、意識、人間関係の変化をコロナ禍で経験していることが示唆された。例えば、感染拡大前後で「増えた」と回答した者の割合が5割以上であったものとして、「家の中で過ごす時間（8割以上）」「家族との関わり（6割以上）」「パソコンやスマートフォンの利用時間（7—8割以上）」「テレビやネット動画をみる時間（6—8割以上）」「ゲームをする時間（前期課程：6割以上）」「SNSをする時間（5割以上）」「メールやLINEなどによるコミュニケーション（前期課程：5割以上）」「オンライン学習の時間（6—7割以上）」「学校以外で勉強する時間（後期課程：5割以上）」「精神的な疲れ（後期課程：5割以上）」の10項目であった。こうした項目内容の主観的な変化はコロナ禍の代表的な影響とされており、他調査でも類似した結果が報告されている（近視予防フォーラム，2020；個別教育舎，2021；国立生育医療研究センター，2021；LINEリサーチ，2020）。特に本研究の結果から、外出自粛やオンライン授業・学習の時間が増えたのに伴い、家の中で過

す時間が増えたと8割以上の生徒が回答しており、その中でパソコンやスマートフォンの利用時間、ネット動画の視聴も増えていることから、コロナ禍において一人で過ごす時間が多くなっていることが伺える。それに付随し、家族との関わりがこれまで以上に増え、家庭環境が生徒個人にもたらす影響は大きいことが予想される。

一方で、感染拡大前後で「減った」と回答した者の割合が5割以上であったものとして、「友だちとの関わり（5割以上）」「先生との関わり（後期課程：5割以上）」「運動する時間（6割以上）」「外で遊ぶ時間（5—6割以上）」の3項目であった。これらの項目は社会的な関わりや身体的な健康を維持する内容であるが、上記の結果と同様に、概ね他調査と類似した結果が示された（近視予防フォーラム，2020；国立生育医療研究センター，2021）。またコロナ禍の令和3年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査より、子どもの体力の低下が危惧されるとともに、運動に対する興味関心が減少していることが報告されている（スポーツ庁，2021）。コロナ禍では三密回避（密閉・密集・密接）が提唱され、不要不急の外出の規制や他者との対面による関わり、地域の感染状況や緊急事態宣言等の発令時には課外活動等の一部活動の制限がされており（厚生労働省，2020；文部科学省，2021b），結果として社会的な関わりや運動頻度の低下は致し方ない状況であることが指摘される。さらに、学校の新しい生活様式が推奨され（文部科学省，2021b），遠隔教育システムの導入や学校内での規制の変化によって友人や教員との関わりがこれまでとは異なる。そのため、生徒によっては孤立に繋がり、生徒の心身の健康に大きな影響を及ぼすことが明らかにされている（萩田，2021；加藤，2020；木下，2021；重村・高橋・大江・黒澤，2020）。先述したように、増

加者の割合が多かった項目の多くは自宅にて、また個人で行われる活動が多く、こうしたコロナ禍の影響が継続される場合には人間関係の希薄化が進み、精神的な健康を低め、何かしらの問題が生じる可能性が考えられるであろう。

以上の結果から、これまでに報告されている調査結果(近視予防フォーラム, 2020; 個別教育舎, 2021; 国立生育医療研究センター, 2021; LINE リサーチ, 2020)と東大附属で独自に行われた調査は、回答の割合や項目内容は異なるものの、概ねコロナ禍における生活の変化に対する傾向は類似していることが示された。こうした社会情勢で中高生の生活は大きく変化し、これまで以上に、個々の生徒の現状に関する実態把握や柔軟な対応が求められていると言える。しかしながら、変化を問う項目内容(例えば、先生との関わりやSNSをする時間、身体的な疲れ)によっては不変であったと主観的に感じている生徒も一定数いることから、学校や家庭での対応の厚さによって生徒の受ける影響には違いが生じることも考えられる。また、社会情勢を鑑みて、これまでの生活と変化がないように、個人で意識的に行動している可能性があり、結果の解釈は慎重に行うべきだと考えられた。

同じコロナ禍の状況下でも、環境にうまく適応できる生徒は精神的な健康が維持できるが、そうでない生徒は著しい精神的な健康の低下を招くことや、問題行動に繋がる可能性もある。この点は生徒だけでなく、教員や学校教育に関わるすべての人々に言え、どのようなサポート体制を構築していくかを考えることは重要である。生徒に限ったことと言えば、中央教育審議会(2020)が提唱しているように、学力保障(学習的機能)、関係保障(社会的機能)、健康保障(福祉的機能)の3つの要素に支えられた健やかな学びを考え

ていかなければならないであろう。

4 まとめと今後の課題

本研究では、新型コロナウイルス感染拡大に伴う環境の変化が中高生の生活に及ぼす影響を検討した。しかし一方で、本研究において以下のよういくつかの課題も残されている。結果を解釈する際の注意点や今後の展望について、最後に述べたい。

まず1つ目として、本研究の分析はあくまでも集団による平均であり、個々での変化は多様であり、結果の解釈に留意することである。2つ目は、回顧法によるコロナ禍前後の変化を示しており、調査協力者の主観的な判断に委ねられ、本来の変化とは異なる可能性がある。また本研究では「少し減った(増えた)」「とても減った(増えた)」を統合しているが、こうした細かな回答の違いも見ていく必要があるであろう。3つ目は、本研究で使用した項目以外にも生活の変化を測定する項目が考えられ(近視予防フォーラム, 2020; 個別教育舎, 2021; 国立生育医療研究センター, 2021; LINE リサーチ, 2020)、全て網羅しきれていない。4つ目は、本研究の結果はあくまでも東大附属に属する中高生の回答傾向であり、一般標準ではない可能性がある。他の中等教育学校では異なる結果を示すことも考えられる。また生徒の属性(性別・年齢・習い事の有無・家庭状況など)によって回答傾向に違いが見られることも指摘され、引き続き、多角的な検討が求められるであろう。そして5つ目として、こうした新型コロナウイルス感染症拡大に伴う生活の変化が主体的・探究的な学びへの取り組みや学習効果・意欲、パーソナリティ、心理的な健康にどのような影響をもたらすのか明らかにすることである。実際に、感染拡大によって生活の変化が増減したことが

ネガティブに働くだけでなく、ポジティブに機能している可能性も考えられ、様々な変数との関連が必要である。

今後も、新型コロナウイルス感染症に関わる影響は生徒の生活の様々な場面において波及していくことが考えられ、生徒の将来の成長の育みに影響すると思われる。こうした影響は現在だけではなく、何年後かの将来の心理的な側面や身体的な側面に関係する可能性がある。そのためには、継続的にコロナ禍における生活の変化を追跡調査し、コロナ禍の多様な影響を様々な視点から、引き続き、検討していくことが必要だと考えられる。

謝辞

調査にご協力頂きました中等教育学校の在校生の皆様と先生方、また調査の実施・運営にご協力頂いた附属パネル調査ワーキンググループの先生方に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 天井響子 (2020). 青年期前期における主体的学習経験と生涯に渡る学びとの関連——都内中等教育学校の卒業生調査から—— 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター研究紀要, 5, 94-106.
- 天井響子・上野雄己・日高一郎・福留東土 (印刷中). 総合的学習経験の経年変化および主体的・探究的な学習態度との関連——東大附属在校生パネル調査から—— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 61.
- 荒木真歩 (2020). 中等教育学校における「卒業研究」がキャリアに与える影響——主体的な学びがもたらす「学び習慣」の獲得に着目して—— 東京大学大学院教育学研究科附属学校

教育高度化・効果検証センター研究紀要, 5, 107-115.

中央教育審議会 (2020). 新型コロナウイルス感染症に対応した新しい初等中等教育の在り方について Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20200526-mext_syoto02-000007441_4.pdf (2022年1月19日)

Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences (2nd ed.)*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Cochran, W. G. (1954). Some methods for strengthening the common χ^2 tests. *Biometrics*, 10, 417-451.

Haberman, S. J. (1974). Log-linear models for frequency tables with ordered classifications. *Biometrics*, 30, 589-600.

本田由紀 (2019). 「探究性」「市民性」「協働性」に関する東大附属中等教育学校生の特徴——在校生調査と他の調査との比較を通じて—— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 58, 201-215.

藤川大祐. (2021). 新型コロナウイルス禍後の学校教育のあり方 日本健康相談活動学会誌, 16, 5-7.

加藤陽子 (2020). 新型コロナウイルス感染拡大に伴う児童生徒の心理的支援. 日本健康相談活動学会誌, 15, 134-138.

川本哲也 (2020). 都内中等教育学校における主体的・探究的な学びとその効果——自尊心の調整効果に着目して—— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 59, 517-526.

川本哲也・日高一郎・梅原章太郎 (2019). 青年の学習内容に対する興味における年齢差と性差——都内中等教育学校におけるパネル調

- 査のベースラインデータから—— 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター, 4, 92-106.
- 川本哲也・日高一郎・荒井恵里子 (2020). 学習内容に対する興味の変化と安定性: 都内中等教育学校におけるパネル調査データから. 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター 研究紀要, 5, 75-92.
- 喜入 暁 (2019). 東大附属中等教育学校卒業生の特徴——「学びと仕事の東大附属卒業生調査」から浮かび上がる卒業生の姿—— 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター研究紀要, 4, 107-127.
- 木下一雄 (2021). コロナ禍の学校における生徒達の支援のあり方——スクールカウンセラー活動を通じて見えてきたこと—— 長崎国際大学論叢, 21, 121-127.
- 近視予防フォーラム (2020). 「新型コロナウイルスによって変化した子どもの生活実態」に関する調査 Retrieved from <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000002.00060256.html> (2020年8月21日)
- 経済産業省 (2020). 新型コロナウイルスの影響を踏まえた 経済産業政策の在り方について Retrieved from https://www.meti.go.jp/shingikai/sankoshin/sokai/pdf/026_02_00.pdf (2021年1月18日)
- 個別教育舎 (2021). コロナ禍における子どもの自宅学習に関する意識調査 Retrieved from <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000003.00077261.html> (2021年1月18日)
- 国立生育医療研究センター (2021). コロナ×子どもアンケート第1回調査報告書 Retrieved from https://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/Cx1_finalrepo_20210306revised.pdf (2022年1月31日)
- 厚生労働省 (2020). 「新しい生活様式」の実践例 Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_newlifestyle.html (2021年1月18日)
- LINE リサーチ (2020). 高校生のおうち時間の過ごし方に関する調査 Retrieved from <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000002200.00001594.html> (2021年1月18日)
- 水本 篤 (2010). サンプルサイズが小さい場合の統計的検定の比較——コーパス言語学・外国語教育学への適用—— 統計数理研究所共同研究レポート, 238, 1-14.
- Meyer, D., & Zeileis, A. (2021). vcd: Visualizing Categorical Data. Retrieved from <https://cran.r-project.org/web/packages/vcd/> (2022年1月18日)
- 文部科学省 (2020). 小中高等学校における ICT を活用した学習の取組事例について Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf (2022年1月20日)
- 文部科学省 (2021a). 遠隔教育システムの効果的な活用に関する実証成果報告会 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20210308-mxt_jogai02-000010043001.pdf (2022年1月20日)
- 文部科学省 (2021b). 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル——「学校の新しい生活様式」—— Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20211210-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf (2022年1月

- 20 日) https://www.mext.go.jp/sports/content/20211222-spt_sseisaku02-000019583_111.pdf(2022年1月19日)
- 文部科学省 (2021c). 新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査 (結果) Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (2022年1月31日)
- 村田史之 (2021). コロナ禍における高等教育. 太成学院大学紀要, 23, 99-107.
- 内閣府 (2020). 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査 Retrieved from <https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/shiryo2.pdf> (2021年1月18日)
- 大枝真一 (2020). コロナ禍が今後の学校教育に与える影響 工学教育, 68, 88.
- 荻田純久 (2021). COVID-19 (新型コロナウイルス感染症) パンデミックにおける青年期のメンタルヘルスに関する考察 教職教育研究: 教職教育研究センター紀要, 26, 1-12.
- R Development Core Team (2021). *R: A language and environment for statistical computing*. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria.
- 重村 淳・高橋 晶・大江美佐里・黒澤美枝 (2020). COVID - 19 (新型コロナウイルス感染症) が及ぼす心理社会的影響の理解に向けて トラウマティック・ストレス, 18, 1-9.
- 総務省 (2020). 第 3 節新型コロナウイルス感染症がもたらす社会への影響 Retrieved from <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r02/html/nd123000.html> (2021年1月18日)
- スポーツ庁 (2021). 令和3年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査結果 Retrieved from https://www.sports.go.jp/press/2021/03/03/20210303_01.html (2021年3月3日)
- 東京大学教育学部附属中等教育学校 (2020). 入学案内 2020 (東京大学教育学部附属中等教育学校) Retrieved from https://www.hs.p.u-tokyo.ac.jp/schoolguide2020/#target/page_no=1 (2021年11月27日)
- 東京大学教育学部附属中等教育学校 PTA 広報委員会 (2021). ぎんなん 東京大学教育学部附属中等教育学校 PTA 広報誌 126.
- 上野雄己・日高一郎・福留東土 (2021). 主体的・探究的な学びがもたらすパーソナリティへの影響——都内中等教育学校の卒業生を対象とした調査から—— 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化・効果検証センター研究紀要, 6, 84-103.
- 上野雄己・日高一郎・福留東土 (印刷中). 中等・高等教育での議論経験がもたらす市民性の涵養 日本教育工学会論文誌, 46.
- 山本義春・日高一郎 (2016). 附属学校パネル調査の概要とデータベースの整備状況に関する報告 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター研究紀要, 2, 196-197.
- 横原知行・上野雄己・日高一郎・福留東土 (2022). 卒後継続調査の実施状況に関する報告——東大附属中等教育学校の卒業生を対象として—— 東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター研究紀要, 7, 101-118.

Copyright © Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research
Graduate School of Education, The University of Tokyo

東京大学大学院教育学研究科附属 学校教育高度化・効果検証センター
Center for Advanced School Education and Evidence-Based Research,
Graduate School of Education, The University of Tokyo
WEBSITE (日本語): <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/>
WEBSITE (English): <http://www.schoolexcellence.p.u-tokyo.ac.jp/en/>